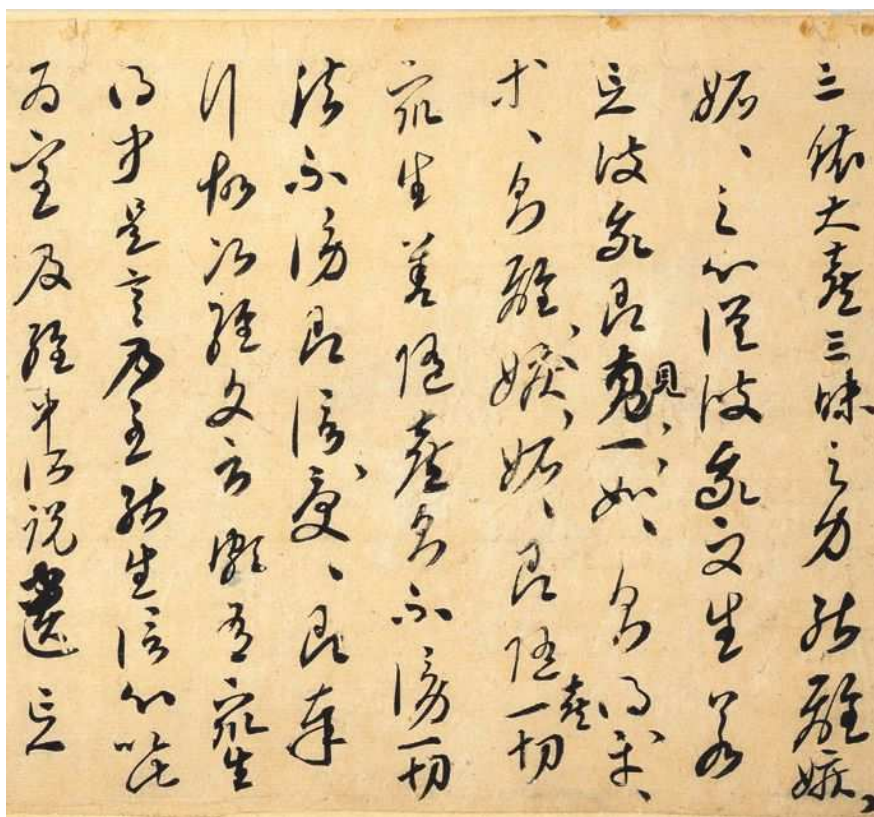


Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第75号

平成22年 10・11・12月



国宝 金剛般若経開題残巻 当館蔵 一特集展示「国宝を味わう」より一

特別展
第62回
正倉院展
10月23日(土)
～11月11日(木)
東・西新館

特別陳列
おん祭と
春日信仰の美術
12月7日(火)
～平成23年1月16日(日)
東新館

名品展
●なら仏像館(本館)●
珠玉の仏たち
10月9日(土)～12月19日(日)
●青銅器館(坂本コレクション)●
中国古代青銅器
10月9日(土)～12月19日(日)

●西新館●
珠玉の仏教美術
12月7日(火)～
特集展示
国宝を味わう
12月7日(火)
～平成23年1月10日(月・祝)

特別展

第62回 正倉院展

10月23日(土)～11月11日(木)

会場：東・西新館

平城遷都一三〇〇年と光明皇后一二五〇年ご遠忌に当たる今年の正倉院展は、正倉院を代表する宝物が数多く出陳されます。出陳点数は北倉一九件、中倉二一件、南倉二八件、聖語藏三件の計七一件で、うち一四件が初出陳です。内容は宝物の全体像が概観できる構成になっていますが、聖武天皇・光明皇后のご遺愛品、東大寺の法要に用いられた品々、平城京に生きた人々の暮らしを伝える品、そして近年新事実の発見で話題を集めた紙に関する宝物が多く出陳されていることに特徴があります。



山水夾纈屏風(北倉)



螺鈿紫檀五絃琵琶(背面)(北倉)



繻線鞋(第3号)(北倉)



蓮花残欠(南倉)



黒柿蘇芳染金絵長花形几(中倉)



正倉院古文書正集第七卷(法師道鏡牒)(中倉)

雑札(装束司牒)(中倉)

聖武天皇・光明皇后のご遺愛品では、十九年ぶりに出陳される螺鈿紫檀五絃琵琶が注目されます。これは世界唯一の五絃琵琶の遺品として著名です。撥受けにはラクダに乗り琵琶を弾く人物が見え、背面には華麗な唐花文様が螺鈿によって表されています。また、聖武天皇の身近くに置かれた山水夾纈屏風と鳥草夾纈屏風、光明皇后が所用されたと推定される繻線鞋のほか、皇后が薬物を大仏に献納した際の目録『種々葉帳』とそれに記されている五色龍崗、大黃、冶葛が出陳されます。

東大寺の法要に用いられた品々では、伎楽面の酔胡王、迦楼羅、師子、そして楽舞の装束である女舞接腰のほか、大仏開眼会を飾った夾纈中幡残欠、蓮花残欠などが展示されます。法要の際には貴顕らがこそつて献納を行ったと考えられますが、銀壺、漆胡樽、青斑石髓合子、銀平脱鏡箱などの工芸品はこのような際の献納品と考えられます。そして、献納に際しては、密陀絵皮箱、蘇芳地彩絵箱、黒柿蘇芳染金絵長花形几などの美しい箱や机が用いられました。



伎楽面 獅子(南倉)



椶地縹緗袍(南倉)

また、税として納められた純や麻布、このような素材をもとに作られた椶地縹緗袍、さらに藤原仲麻呂、良弁や道鏡など、歴史上著名な人物の署名のある文書、税に関する文書や木簡なども展示されます。このような品々は、奈良時代の社会の様子を生き生きと今に伝えてくれます。

一年に一度のこの機会に、奈良時代を生きた人々の息吹を感じてください。

特別陳列

おん祭と 春日信仰の美術

12月7日(火)～平成23年1月16日(日)
会場…東新館

歳末の奈良を彩る風物詩・春日若宮おん祭は、平安時代の保延二年(一一三六)九月十七日にはじまったとされています。その後祭日は、室町時代から十一月二十七日、明治十一年(一八七八)からは現行の十二月十七日と変わりましたが、その間絶えることなく続いたとされ、今年で八七五回を数えます。



春日赤童子像
奈良・植槻八幡神社蔵



◎能面 増女 東京国立博物館蔵
(錦楽舎旧蔵 金春家伝来)



◎能装束 白地雪持柳扇面肩裾模様縫箔
東京国立博物館蔵(錦楽舎旧蔵 金春家伝来)



◎春日宮曼荼羅 奈良・南市町自治会蔵



春日千体地藏図 当館蔵

この展覧会は、おん祭の行われる季節に合わせて、主祭神である若宮神やおん祭に関する品々を集め、展示を通じておん祭の一端を紹介する企画です。今回は奈良に都が置かれた時代にその祖型が伝わり、後に日本を代表する芸能へと育っていった能楽(猿楽)に注目し、面や装束、楽器など関連資料を展示します。また、春日社を氏社とする藤原氏の祖霊神として尊崇された春日三宮に注目し、その本地仏と目された地藏菩薩への信仰を中心に取り上げます。加えて、春日講に關係する資料を通じて春日信仰の広がりや多様性を感じていただければ幸いです。



猿錠蒔絵大鼓胴 奈良・春日大社蔵

特集展示

国宝を味わう

12月7日(火)～平成23年1月10日(月・祝)
会場…西新館

当館の西新館は、耐震補強工事のため昨年11月から1年近くの間、休館しておりましたが、10月23日に開幕する「第62回正倉院展」の会場として再開します。

そして、工事にもなつてお休みしておりました、絵画・書跡・考古・工芸部門の平常展示も、12月7日より、名品展「珠玉の仏教美術」として、装いも新たに復活します。そのオープニング記念として、西新館の一室にて、特集展示「国宝を味わう」を開催する運びとなりました。当館の所蔵品および寄託品から、名品中の名品を集結し、国宝の美の世界に浸っていただこうというものです。

このたびの工事にもなう休館中には、展示ケースも新調し、照明や内装も大幅に模様替えをいたしました。展示室の雰囲気は、これまでとは全く異なるものとなっています。この新しい空間で、国宝の数々に出会い、また新たな発見をしていただけることと思います。



◎十一面観音像 当館蔵

スリランカ仏蘭寺にて

内藤 栄（当館学芸部長補佐）

この夏、種智院大学の頼富本宏教授（密教学）一行とスリランカに調査に行く機会を得た。ここには釈迦の蘭と伝えられる仏蘭を守り伝える仏蘭寺があり、舍利信仰の美術を研究する者としては、ぜひ一度訪れなければいけないと思っていた国である。スリランカに足を踏み入れた第一印象は、「インドに似て何かが違う」ということであつた。やがて、それが派手な色彩とキッチュな造形の寺院に代表される、ヒンドゥー教文化の影響が少ないことであると気付いた。スリランカ国民の大半は仏教を信奉しており、そのせいか寺院のたたずまいや街並みも、日本人にそれほど違和感を抱かせないように思えた。このインドの隣にある仏教国という地理的条件が、既にインド本国では失われた古代インドの仏教を二千年以上にわたり生きた姿で伝えるという奇跡をもたらした。

その一つが、キャンディーで今も毎年夏に行われるペラヘラ祭である。これは仏蘭寺（写真）の仏蘭を象の背に乗せ市内を練り歩く行事で、先導する火の曲芸やキャンディーダンスが有名であるが、本来は舍利の「お練り」祭である。もともと仏蘭はインド・カリンガ王の王女ヘーママラーによつて四世紀にスリランカにもたらされ、古都アヌラダプラに建立された仏蘭寺に祀られた。その頃より、毎年仏蘭寺から王城の北にある無畏山精舎まで仏蘭を運び、九十

日間にわたり礼拝、供養することが行われた。五世紀はじめにスリランカを旅した中国の僧、法顕はそれを見て詳しく記録に残している。それによれば、王は道の両側を様々な作り物で飾り、仏蘭がお出ましになると人々は道中で供養し、精舎に到着後は雲集した人々によつて焼香や灯明で供養され、種々の法要は昼夜止まらなかつたという。今日のペラヘラ祭でも呼び物になっている象は既に重要な役柄で登場しており、仏蘭がお出ましになる前に、王の衣装を着た弁士が象に乗り、仏を称えながら太鼓を叩き街中を行進したという。この祭は王が取り仕切っていたらしい。

王による舎利の供養は、紀元前三世紀にインドを統一したアシヨカ王も行なつたというから、スリランカの仏蘭供養はそれに影響を受けて始められた可能性がある。今日のペラヘラ祭がかつてとまったく同じ姿ではないにしても、今日まで続いてきたこと自体が偉大な遺産である。

王による舎利供養は中国・唐でも行われた。歴代皇帝は法門寺の塔を三十年に一度開き、舍利を取り出して宮中に運び、天下泰平と民の平安を祈願した。宮中での供養が済むと城内の寺院に移して人々に礼拝、供養させたという。まさにスリランカの仏蘭供養のスタイルそのままである。

やがて宮中での舎利供養は日本でも行われるようになってきた。平安時代初期に空海が宮中で正月の年中行事として始めた後七日御修法がそれである。空海は唐から帰国する際に師・恵果より南インド伝来の仏舎利を賜り、帰国後それを東寺の宝蔵に安置した。舍利は後七日御修法の際

に東寺より宮中に運ばれ、七日間にわたる法要の本尊となった。法要の目的は国家の平安と五穀豊穡であり、主宰者は天皇であつたと思われる（ただし、後世後七日御修法は天皇のための法要へと変わつてゆく）。後七日御修法のスタイルは法門寺舎利の供養と似ており、そして遠くスリランカの仏蘭供養さえ髣髴させる。後七日御修法は空海が留学中に法門寺舎利の供養のを知り、それにヒントを得て始めたと推定されるが、法門寺舎利の供養は王者による舎利供養というアシヨカ王時代の伝統を受け継ぐものかもしれない。とすれば、後七日御修法もアシヨカ王による舎利供養やスリランカの仏蘭供養の流れを汲むかもしれない……など空想をスリランカでふくらませた。

大陸の隣にある島国という条件は日本も同じである。中国では皇帝による法門寺舎利の供養は唐時代を最後に途絶えたが、日本では後七日御修法が今日も続いている。

スリランカと共通する地理的条件が古代の二つの舎利供養を今日に守り伝えたと言えなくもないだろう。いつか、この二つの行事をつなぐ糸をたぐり寄せないものかと、空想は続いている。



仏蘭寺（キャンディー）

出陳一覽

名品展

珠玉の仏たち

10月9日～12月19日
なら仏像館(本館)

像(歡喜寺)、○木造宝冠阿弥陀如来坐像(當麻寺)、○木造裸形阿弥陀如来立像(浄土寺)、木造如来立像(当館)

(春覚寺)、○木造地藏菩薩立像(長命寺)
【明王】 第7室
木造五大明王坐像(当館)、○木造不動明王坐像(園城寺)、○木造不動明王坐像(正寿院)、○木造愛染明王坐像(当館)

銅造藏王権現立像(大峯山寺)、木造金剛童子立像(当館)
【動物彫刻】 第12室
○木造獅子、木造獅子(以上、当館)、○木造狛犬(手向山八幡宮)、○木造狛犬(当館)

【観音菩薩】 第1室

○木造観音菩薩立像(観心寺)、○木造観音菩薩立像(文化庁)、木造観音菩薩立像(当館)、○木造観音菩薩立像(勝林寺)、○木造十一面観音立像(薬師寺)、○木造十一面観音立像(勝林寺)、○木造十一面観音立像(地福寺)、○木造十一面観音立像(新薬師寺)、○木造十一面観音立像(西光院)、○木造十一面観音立像(元興寺)、○木造千手観音立像(園城寺)、○木造千手観音立像(妙法院)、○木造如意輪観音坐像(当館)、○木造不空羂索観音坐像(東鳴川観音講)、○木造馬頭観音立像(浄瑠璃寺)

【中国の石仏】 第4室

○石造如来三尊像(当館)、○石造如来三尊像(個人)、○石造十一面観音立像(当館)、石造如来立像、石造如来九尊像、石造如来坐像(以上、個人)

【塑像と埴仏】 第4室

侍者像(奈良県法隆寺塔本塑像)(当館)、○塑像断片(奈良県薬師寺西塔跡出土)、○薬師寺、○塑像断片(奈良県川原寺裏山出土)(明日香村)、○塑像断片(滋賀県雪野寺出土)(当館)、○塑像断片(奈良県定林寺出土)(当館)、方形独尊埴仏(中国)(当館)、多宝塔埴仏(中国)(個人)、火頭形三尊埴仏(伝奈良県橘寺出土)(当館)、方形三尊埴仏(奈良県川原寺裏山出土)(明日香村)、六角形埴仏(三重県天華寺跡出土)(当館)

【上代の金銅仏】 第8室

○銅造誕生釈迦仏立像(正眼寺)、○銅造誕生釈迦仏立像(悟真寺)、銅造誕生釈迦仏立像(個人)、銅造観音菩薩立像(興福院)、銅造如来立像(当館)、○銅造観音菩薩立像(金剛寺)、○銅造観音菩薩立像(観心寺)、銅造観音菩薩立像(個人)、○銅造観音菩薩立像(法隆寺)、銅造観音菩薩立像(当館)

【檀像】 第8室

○木造薬師如来坐像(当館)、○木造観音菩薩立像(本山寺)、○木造十一面観音立像(当館)、○木造釈迦如来坐像(東大寺)、木造如意輪観音坐像(当館)、○木造諸尊仏龕(寂照寺)、○木造諸尊仏龕(寂照寺)

【仮面】 第13室

○舞楽面(新島蘇(春日大社)、舞楽面(陵王)、○舞楽面(貴徳)(以上、東大寺)、舞楽面(還城楽)、舞楽面(胡徳楽)(以上、個人)、○舞楽面(胡徳楽勸杯)、○舞楽面(胡徳楽瓶子取)(以上、手向山八幡宮)、舞楽面(二の舞(腫面)(当館)、能面(三光尉・一角仙人・生成・小面(根来寺)、○菩薩面(浄土寺)

名品展

中国古代青銅器

10月9日～12月19日
青銅器館(坂本コレクション)

中国古代の商(殷)から漢代に製作された、青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、斚、方彝、卣、罍、鼎、鬲、鬯、豆、盤、匜、盃、壺、鐘、鈃、扁壺、蒜頭壺、甗、鍤、博山炉、鎮子、鏡、鐙など(当館)

【如来】 第2室

○木造釈迦如来立像(法明寺)、○木造薬師如来立像(元興寺)、○木造薬師如来坐像(勝林寺)、○木造薬師如来坐像(長隆寺)、木造阿弥陀如来坐像(当館)

【護法の天部形】 第1室・第9室

○木造増長天立像(法明寺)、○木造増長天立像(称名寺)、木造広目天立像、木造毘沙門天立像(以上、当館)、木造四天王立像(現光寺)、○木造十二神将立像(六軀)(東大寺)、木造十二神将立像(十二軀)(当館)

【菩薩】 第5・6室

○木造文殊菩薩坐像(薬師寺)、○木造観音菩薩立像(細見美術財団)、○木造観音菩薩立像(個人)、木造弥勒菩薩立像(林小路町自治会)、木造菩薩半跏像(文化庁)、木造地藏菩薩立像(十市町自治会)、○木造地藏菩薩立像(大福寺)、○木造地藏菩薩立像(当館)

【神仏習合】 第11室

○木造八幡三神坐像(薬師寺)、○木造大將軍神坐像(大將軍八神社)、木造大將軍神坐像、木造伊豆山権現立像、木造男女神坐像(以上、当館)、○

●国宝

●重要文化財

※すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。



○山代忌寸真作墓誌(当館)



○孔雀鎗金経箱(浄土寺)



金銅種子華鬘(当館)



●両界曼荼羅[金剛界](子嶋寺)

特集展示

国宝を味わう

12月7日～平成23年1月10日

西新館

●十一面観音像(当館)、●金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅(第六塔)(大長寿院)、●一遍聖絵(第六卷)(清浄光寺)、●夜色楼台図(個人)「12月7日～12日」、●伝教大師筆尺牘(久隔帖)「12月14日～1月10日」、●金剛般若経開題残卷(弘法大師筆)、●紫紙金字金光明最勝王経(以上、当館)、●金銅伏鉢(談山神社)、●牛皮華鬘(登号・呂号「12月7日～12月26日」、●牛皮華鬘(知号・留号)「12月28日～1月10日(以上、当館)、●金銅透彫舍利容器(西大寺)、●金銅透彫華鬘(金色院)、●金銅透彫華籠(神照寺)、●鉄宝塔(西大寺)、●金銅密教法具(厳島神社)

名品展

珠玉の仏教美術

12月7日～平成23年1月16日

西新館

●両界曼荼羅(子嶋曼荼羅)(子嶋寺)、●高雄曼荼羅図像(長谷寺)、●胎藏図像(当館)、●一字金輪曼荼羅(南法華寺)、●尊勝曼荼羅(当館)、●大日如来像(金剛峯寺)、●七髻文殊像(宝寿院)、●五大虚空蔵曼荼羅(大覚寺)、●五大尊像(来振寺)、●不動明王・二童子像(瑠璃寺)、●俱利伽羅龍・二童子像(当館)、●愛染明王像(細見美術館)、●十二天像のうち毘

沙門天・月天(西大寺)、●十三天像(二幅)(聖衆来迎寺)

【書跡】

月燈三昧経卷第六、阿闍世王経卷下(五月一日経)、大智度経論卷第六十六(既多寺知識経)、●中阿含経卷第九(善光寺)、法華経卷第二(蝶鳥下絵料紙)、金剛頂経瑜伽十八会指帰(中尊寺経)(以上、当館)、弘法大師二十五箇条遺告(能満院)、●慈円僧正懷紙、●元庵普寧墨跡、●清拙正澄墨跡法語(以上、当館)、●禅院額字前後(東福寺)、絶海中津墨跡(買島詩、策彦周良墨跡(探春(以上、慈濟院)

【考古】

注口土器ほか(小野コレクシヨ)(青森・岩手県出土)、銅矛(長崎県黒島出土)、銅鐸(静岡県三ヶ日町出土)、●銅鏡(奈良県天神山古墳出土)、金製耳飾・金銀象嵌鳳凰文把頭ほか(奈良県塚山(星塚)古墳出土)、人物線刻子持壺付装飾壺(伝愛媛県松山市出土)、軒丸瓦(奈良県横井廃寺出土)、軒丸瓦(奈良県山田寺跡出土)、軒丸瓦(奈良県川原寺出土)、軒丸瓦・軒平瓦(奈良県山村廃寺出土)、軒丸瓦・軒平瓦(島根県出雲国分寺跡出土)、隅木蓋瓦・風鐸(和歌山県上野廃寺出土)(以上、当館)、鬼身文鬼瓦(奈良県薬師寺出土)(京都国立博物館)、鬼面文鬼瓦(奈良県中山瓦窯出土)、●山代忌寸真作墓誌、行基舍利瓶残欠、●佐井寺僧道業墓出土品(墓誌・骨壺)、灰釉短頸壺・同皿(茨城県八郷町出土)、●銅製経筒(天治二年銘)・外筒、法華経(和歌山県粉河経塚出土)、●銅製経筒(保延七年銘)(福岡県出土)(以

上、当館)、●線刻蔵王権現鏡像(奈良県金峯山出土)(金峯山寺)、●滑石製弥勒如来坐像(長崎県鉢形嶺経塚出土)(当館)

【工芸】

●阿弥陀如来鏡像、蔵王権現鏡像、如来鏡像、男神対向鏡像、●山王十社本地懸仏、十一面観音三尊懸仏、聖観音懸仏、石製舍利容器、金銅棺形舍利容器、銀製層塔形舍利容器及び金製内容器(以上、当館)、●金銅火焰宝珠形舍利容器(海龍王寺)、●金銅三角五輪塔(浄土寺)、●四方殿舍利厨子(能満院)、●首懸駄都種子曼荼羅彩絵厨子(当館)、●五輪塔嵌装舍利厨子(不退寺、牛玉像(海住山寺)、●春日龍珠箱、百万塔及び無垢浄光経陀羅尼、神護寺経帙(以上、当館)、●金銅透彫経筒(万徳寺)、●孔雀鎗金経箱(浄土寺)、●金銅尾長鳥文華鬘(個人)、●金銅種子華鬘、金銅種子華鬘(以上、当館)、●刺繍三昧耶幡、銅王子形水瓶、銅仙蓋形水瓶、銅信貴形水瓶、銅布薩水瓶(鯉口)(以上、当館)、●銅仏銅鉢(金剛峯寺)、●銅三具足(聖衆来迎寺)、金銅柄香炉(高山寺)、金銅火舎(当館)、●堆朱香盆(聖衆来迎寺)、古式三鉢杆(当館)、●銅鏡(円福寺)、●金銅四天王五鉢鈴(弥谷寺)、●金銅四天王五鉢鈴(当館)、金銅独鉢杆(松尾寺)、金銅三鉢杆、金銅五鉢杆(以上、当館)、●金銅五鉢鈴(個人)、●金銅独鉢鈴・金銅三鉢鈴・金銅宝珠鈴(五種鈴のうち)(当館)、金銅一面器(西大寺)、金銅羯磨、金銅輪宝(以上、当館)、●紙胎漆塗彩絵華籠、●黒漆蒔絵戒体箱(以上、万徳寺)、●黒漆金銅装成体箱(金剛

寺)、金銅装鳥宝相華文説相箱、●錫杖頭(以上、個人)、錫杖頭(当館)、●螺鈿玳瑁唐草文合子(當麻寺)、黒紫地蓮唐草文符衣(奈良豆比古神社)

※●Ⅱ国宝、●Ⅱ重要文化財

※すべての展示において、内容を一部変更する場合があります。

※お知らせ①

当館では、7月21日より展示館の呼称を一部変更し、旧称「本館」は「なら仏像館」とし、本館の南に位置する付属棟は「青銅器館」といたしました。

※お知らせ②

当館では、これまで「仏教美術の名品」として親しまれてきました「平常展」の名称を改め、「名品展」として再開することになりました。名品展「珠玉の仏たち」は、なら仏像館(本館)にて10月9日(土)よりオープンし、名品展「中国古代青銅器」は、青銅器館坂本コレクシヨにて同日にオープンします。また、正倉院展終了後の12月7日(火)には、西新館にて、名品展「珠玉の仏教美術」が始まります。

※お知らせ③

西新館の改装にあわせ、休憩室に新たな展示コーナーを設けました。西新館が再開する10月23日からは、当館敷地内にある春日塔跡からの出土品を展示します。

【西新館 西休憩室】10月23日～
春日塔跡出土品(当館)

話題

茶室「八窓庵」と

奈良国立博物館

吉澤 悟(当館学芸部教育室長)

奈良国立博物館の南側、日本庭園の片隅に、草庵式の茶室がひっそりと建っています。名前は「八窓庵」。茶席に開いた窓が八つあることからその名があります。

八窓庵は、もとは興福寺の大乗院内にあったものです(現在の奈良ホテル南側の池畔付近)。東大寺四聖坊(今の正倉院付近)にあった茶室「隠岐録」(東京の井上邸に移築、戦災で焼失)、興福寺慈眼院の六窓庵(東京国立博物館に移築)と共に「大和三茶室」と称された、名高い茶室です。明治年間に大乗院が廃寺となり、一度は個人の所有に帰したものを、篤志家七名の努力によって明治二十三年(一八九〇)に博物館への寄贈が提起されました。博物館の敷地内に移築されたのは、同二十五年のことです。



一方、奈良国立博物館の方は、明治二十二年に「帝國奈良博物館」の設置が公布され、内匠寮技師片山東熊により本館現在の「なら仏像館」が設計されました。東熊は、後に赤坂離宮の設計も手がけた洋風建築の大家です。明治二十五年に起工式、同二十八年の夏になってようやく博物館として開館しました。八窓庵の移築は、博物館開館にさきがけること三年、本館建

設とほぼ同時期に行われていたのです。百年前の移築の時点で、既に百五十歳を越える古茶室でしたので、博物館の敷地に初めて建ったのが最古の建築ということになります。

ところで、博物館の誕生前から茶室が存在するとは、やや不可解な現象にも見えます。その背景には、名茶室を永世に残したいと願う篤志家たちの想いと、帝國博物館への期待感があつたのは間違いありません。特に八窓庵の歴史には、「博物館には茶室が付き物」という認識が生まれる過程に深い縁があるのです。

慶応三年(一八六七)、パリの万国博覧会では江戸幕府や薩摩藩の名産品が紹介されました。博物館のさきがけです。その会場には日本庭園の付いた茶席が設けられ、芸妓が湯茶をサービスしたそうです。後に日本の博物館創設に活躍する町田久成は、会場視察団の一員として、パリ子に評判だったこの茶席の様子を観察しています。また、明治五年(一八七二)の京都博覧会でも、町田は茶席が外国人をはじめとする観覧客に好評を博する様子を見えています。名品鑑賞と茶席。日本文化の紹介にこれほど良い組み合わせはないと思ったことでしょう。私的なレベルであれ、日本で初めての博物館構想に、ティー・セレモニーが影響を与えていることは面白いことです。明治十五年、町田は東京帝國博物館の初代館長となり、その際に、慈眼院の六窓庵を東京に移築します。これに呼応するかのようになり、数年後、八窓庵は奈良の博物館に移ることになりました。以後、古寺や名家に伝わる茶室が、博物館にも移築、保管される流れが生まれて行きます。

八窓庵は、古田織部好みの江戸中期を代表する茶室、という文化的価値のみならず、近代博物館の歩みとも切り離せない歴史遺産でもあるのです。

● 公開講座 ●

「第62回 正倉院展」

10月23日(土)「獅子面の模造をめぐって」

山片唯華子氏(宮内庁正倉院事務所保存課調査室員)

10月30日(土)「正倉院の紙」

湯山賢一(奈良国立博物館館長)

11月 6日(土)「五絃琵琶と紫檀工芸」

関根俊一氏(帝塚山大学教授)

特別陳列 「おん祭と春日信仰の美術」

12月11日(土)「若宮おん祭と大和の猿楽-猿楽の座の年初め-」

宮本圭造氏(法政大学准教授)

時間：各回とも 午後1時30分～3時(午後1時開場)

会場：当館 講堂

定員：196名(先着順。午後1時より、講堂入口で入場券を配布します)

料金：無料

※入場の際には、展覧会の観覧券もしくはその半券をご提示ください。

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は名品展については無料、特別展については400円で観覧できます(共催展の場合は別途定めるものとします)。学生証(引率教職員は身分証明書)の提示をお願いいたします。〈会員大学等〉大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、大阪樟蔭女子大学・大阪樟蔭女子大学短期大学部・樟蔭高等学校・樟蔭中学校、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、京都ノートルダム女子大学、京都文教大学・京都文教短期大学、近畿大学文芸学部、近畿大学大学院文芸学研究科、実践女子大学・実践女子短期大学、就実大学人文学部、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学・同志社女子大学・同志社高等学校・同志社香里高等学校・同志社女子高等学校・同志社国際高等学校、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化女子短期大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学・龍谷大学短期大学部(五十音順)(2010年9月30日現在)

● サンデートーク ●

サンデー・トークは毎月1回、日曜日の午後に当館研究員や専門家が皆さまのためにお話をいたします。美術や歴史、展覧会や博物館の活動など、日ごろ聞くことのできない「通」な話を、肩肘張らずに聞くことが出来ます。

今年度は当館研究員の一人一人が「今だから聞いて欲しい話」を持ち寄り、熱く語ることにしました。どうぞお気軽にご参加下さい。聴講は無料。展覧会観覧券等の提示は必要ありません。事情により、講師や話題内容の変わることもありますので、詳しくは当館ホームページをご参照の上お出かけ下さい。

10月17日(日) 「天馬Part2—正倉院宝物に描かれた天馬」

吉澤 悟(当館学芸部教育室長)

11月21日(日) 「装飾文様の話」

永井洋之(当館学芸部研究員)

12月19日(日) 「春日曼荼羅と春日若宮の文殊信仰」

谷口耕生(当館学芸部保存修理指導室長)

(平成23年)

1月16日(日) 「阿育王塔の本生図」

稲本泰生(当館学芸部企画室長)

2月20日(日) 「蓬萊の玉の枝—作り物閑話」

清水 健(当館学芸部研究員)

3月20日(日) 「奈良の仏像(仮)」

鈴木喜博(当館学芸部上席研究員)

※各回とも午後2時～3時30分(開場は午後1時30分)。当館講堂にて。定員196名(先着順)。聴講無料

◆奈良国立博物館賛助会

2010年9月30日現在、一般会員(個人)31名、一般会員(団体)17団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。新しく加入された方をご紹介します。

【一般会員(個人)】富山哲榮様(平成22年8月ご入会)

増子 正様(平成22年9月ご入会)

【一般会員(団体)】大日本印刷株式会社様(平成22年9月ご入会)

じゅういち めん かん のん りゅう ぞう ほうけい じ 十一面観音立像(旧宝慶寺石仏)

1面 石造 高85.1cm
中国 唐時代 長安3～4年(703～4)
重要文化財
奈良国立博物館所蔵

中国西安・宝慶寺伝来のこの十一面観音像は、かつて光宅寺の「七宝台」なる建造物を荘厳していた石仏群の一つである。唐の都長安の洗練された作風を示し、丸顔に潤いのある眼差しを浮かべた表情、下半身に薄い着衣が密着するすらりとした立ち姿は実に美しい。

載初元年(690)9月、唐の皇帝・高宗の後であった武則天が帝位についた。中国史上唯一の女帝の誕生であり、国号は周と改められた。文字通りの「革命」(王統すなわち天命を革る)である。この前代未聞の事態に際し最大限に利用されたのが仏教であり、『大雲経』の所説を強引に解釈した注釈書が出現し、則天は救世主・弥勒と同一視された。

儀鳳2年(677)、霊能者の言に従い長安市街の光宅坊を勅命で掘ったところ、万余粒の仏舍利が発見された。この奇瑞は則天の即位を正統化すべく行われた事前工作であり、件の注釈書にも記され、即位の前兆と位置づけられた。光宅寺はこの地に建てられ、七宝台及び本像を含む石仏群も、則天翼賛を強く意図して造られた。

本像が右手に持つ印章には、「滅罪」の二文字が刻されている。像の前で過ちを悔いれば、美しき観音が、「お前の罪は取り除かれた」と保証してくれる一本像を歴史から切り離し、この点だけに目を向ければ、うっとりした気分になる。しかし本来心の内面に関わるものであるべき仏前での懺悔は、本像造立時には政権賛美と一体化し、異様な相貌をみせていた。すばらしい作品だが、仏像を前に情緒に流されてしまってよいのか、とも思う。

稲本泰生(学芸部企画室長)

※なら仏像館

名品展「珠玉の仏たち」にて10月9日～12月19日に展示

展示品の みどころ

せい せつしょう ちよう ぼく せき ほう ご 清拙正澄墨跡 法語

1幅 紙本墨書 縦33.1cm 横102.0cm
鎌倉時代 嘉暦2年(1327)
重要文化財
奈良国立博物館所蔵



中国福州の出身で、嘉暦元年(1326)に来日した清拙正澄(1274～1339)の墨跡である。

清拙正澄は、はじめ博多から上陸し、翌年正月に京都へ至り、2月には鎌倉幕府の北条高時に迎えられて建長寺の第二十二世となった。浄智寺や円覚寺に歴住した後、元弘3年(1333)に後醍醐天皇に招かれて京都の建仁寺へ入り、さらに南禅寺に遷った。暦応2年(1339)没。大鑑禅師と称される。13年間の滞日中には、『大鑑清規』を撰述するなどして、日本禅林の規範の整備にも努めた。

この墨跡は、清拙正澄が建長寺に入ってまもない嘉暦2年(1327)4月22日に、月窓禅門なる人物の求めに応じ、与えた法語である。全文27行にわたり、生死輪廻の世界を乗り越えて悟りの境地に至るため、禅の修行に励むことの重要性が説かれている。料紙には竹紙を用い、力強さを感じさせるための筆遣いで記される。末行には、建長寺の住持たる清拙正澄の署名(花押)と、「中峯正伝」の印文を持つ朱印が捺される。月窓禅門という人物については不詳だが、鎌倉幕府の要人の一人かと考えられている。

本品は昭和59年(1984)に当館の所蔵品となったが、当時から表面に傷みが目立ち、展示公開の機会を限定せざるをえなかった。本品の保存修理については長らく懸案事項となっていたが、このたび平成20年度より2箇年にわたって実施され、ようやくもとの姿を取り戻すことができた。今回が修理完成後はじめての公開となる。

野尻 忠(学芸部主任研究員)

※西新館

名品展「珠玉の仏教美術」にて12月7日～1月16日に展示

開館日時(10月～12月)

■開館時間

平常時(10月9日～22日および11月12日以降)
午前9時30分～午後5時
(10月22日までの毎週金曜日と、
12月17日(金)は午後7時まで)

正倉院展会期中(10月23日～11月11日)

月曜日～木曜日:午前9時～午後6時
金・土・日曜日、11/3(祝):午前9時～午後7時

※いずれも、入館は、閉館の30分前まで

■休館日

10月1日(金)～8日(金)、1月1日(土・祝)、
毎週月曜日(ただし10月11日(祝)は開館し、
翌12日(火)は休館)

※正倉院展の会期中は無休

観覧料金

第62回 正倉院展

	一 般	高校・大学生	小・中学生
個人(当日)	1,000円	700円	400円
団体・前売	900円	600円	300円
オートムレイト	700円	500円	200円

- *団体は20名以上です。
- *オートムレイトは、閉館の1時間30分前以降に販売する当日券の料金です。
- *障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。

特別陳列・名品展ほか

	一 般	大学生
個 人	500円	250円
団 体	400円	200円

- *高校生以下および18歳未満の方、満70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。



●バス停

〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。



奈良国立博物館
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内) ハローダイヤル 050-5542-8600 ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。